

成城大學と敦煌研究院との交流

上原 和

一

生として迎えた。宿舎は大学の校舎から間近にある運動部の合宿所の一部屋を借りた。

昭和六一年（一九八六）四月に、成城大学の文藝学部長に就任した私は、当時敦煌研究院から、客員研究員として賀世哲氏を、また研究生として若年の劉永増氏を招いていた東京藝術大学の美術学部に倣って、成城大学でも敦煌研究院から研究者を招いて相互に交流することを教授会で提案した。私にとっては、敦煌は昭和五四年（一九七九）四月の初旅以来、すでに三度訪問した曾遊の地であり、賀世哲・劉永増両氏とも旧知の仲であった。

早速、翌年の昭和六二年（一九八七）四月から一年間、敦煌研究院から接待部所属の朱洪江氏を、文藝学部の研究

院接待室通訳のまだ少女のような賀小萍^{がしやうへい}さんを、文藝学部の研究生として迎えた。ところが思いがけないことにその翌月の五月八日の午前中に、敦煌研究院の段文傑院長が成城大学に来訪し、加藤一郎成城学園長はじめ山田俊雄成城大学長、文藝学部長の私に、それぞれ挨拶し、賀小萍の受け入れに謝意を述べるとともに、さらに文藝学部の大教室で、学生たちに『敦煌藝術の魅力』と題して講演を下さった。私たちは歓迎の午餐会を開催して、歓談した。遠方から来日して、部下の若い研究員のために謝禮の挨拶をなされた段文傑院長の禮義正しさと、若い部下の海外で



挿図1 敦煌莫高窟の遠望。背後は鳴沙山の砂丘

の生活を氣遣われる思いやりの深さに、私は心を打たれずにはいられなかった。

なお、翌年の平成二年（一九九〇）の三月には、私は二期続けた文藝学部長の四年間の任期を終え、四月から大学院文学研究科長に転出するのであるが、早速にも同年の四月には、敦煌研究院の幹部である蔡偉堂氏を、大学院の客員研究員として迎えている。宿舎も成城七丁目に新築された「成城大学インターナショナル・レジデンス」であった。蔡偉堂氏とはその後私が敦煌莫高窟の調査に行く度に世話になり、二五年後の今日まで元日には、中國風の華麗な年賀状が航空便で届いている。私も毎年葉書の年賀状を封筒に収めて航空便に托している。

さらに平成七年（一九九五）三月の私の停年退職後も、すでに東京藝術大学に在留していた趙聲良氏が、平成一〇年（一九九八）四月から五年間、成城大学大学院文学研究科に外国人客員研究員として在学し、中國美術史担当の東山健吾教授のもとで研究を続けている。私が同氏に會ったのは、平成一五年（二〇〇三）五月七日、成城大学の近くにある中國茶坊（櫻華）における送別会の際で、同氏の名刺にはすでに学位の取得が記されていた。そのときに戴い



挿図2 卒業生の藤井由紀子さんの案内で来訪した賀小萍さんと、東京藝大の
研究員の劉永増氏（書斎の応接室）

た論文「敦煌隋唐壁画説法図に表れた「聖樹」」（『成城大
学美学美術史』第九号抜刷）には、敦煌莫高窟の隋唐壁画
に見られる印度や西域から伝えられたマンゴー系の聖樹の
様式が、挿図入りで、巧みな日本語を駆使して、詳細に記
述されていた。

その趙聲良氏とは、私が成城大学を退職してから八年後
の、平成一五年（二〇〇三）の三月二日の夜、敦煌研究院
の段文傑院長のお宅に伺ったこともある卒業生の北村永さ
んの案内で、同僚の殷光明氏と一緒に、わが家に来訪し、
一夕盃を交して歓談した。殷光明氏は平成元年（一九八
九）四月から、成城大学文藝学部研究生として一年間在
学した賀小萍さんの夫君であったが、北村さんの話では、
私と会った一〇年後に逝去している。

ところで、賀小萍さんと云えば、平成元年（一九八九）
の四月敦煌研究院のまだ幼い少女のような感じの留学生を
気遣って、成城大学に来訪された段文傑院長に謝意を述べ
るために、私は五ヶ月後の九月六日に敦煌研究院を訪ね
て、一四日まで滞在した。六月に北京の天安門で学生たち
の暴動事件があり、中国人の國內旅行が一切禁止されてい
たので、莫高窟には観光客の姿が全く見られなかった。敦

煌研究院に着いた翌日の夕刻、私の来訪を欣ばれて、段文傑院長主催の歓迎会が開かれ、席上段院長は、本日より敦煌研究院では、私を中國人の学者と同じ資格で待遇すると仰言つて下さった。莫高窟の調査に際しては、修理中の窟以外は、自由に調査することが許されたのである。

早速、翌朝から莫高窟の調査へ赴いたが、その際に、二年前の昭和六二年（一九八七）に一年間成城大学の文藝学部に留学していた朱洪江君が大欣びで、新たに紹介された同僚の羅華慶君と一緒に、終始私に付添つて、觀光客の全く絶えた莫高窟の窟内で私の世話をしてくれた。窟内の高い位置にある壁面を調べるときには、二人が机と踏台を用意して、その上に立つて懐中電燈を照してノートしている私の両脚を支えてくれた。

私は、觀光客が全く絶えているこの機会にと思い、昼食時の休憩以外は、終日窟内にこもつて、私の年来の研究対象である摩訶薩埵本生図のある窟を、北魏から宋代に至るまで見て回つた。この物語のクライマックスである（捨身飼虎）の場面で、わが身を飢えた母虎と子虎たちに与えるべく、崖上から身を投げ、崖下に横たわっている薩埵王子に喰いつている子虎の数が、北魏から隋代まで七頭で

あったものが、吐蕃（チベット）に莫高窟が占領されていた中唐期には、子虎の数が三頭であつたり、五頭、或いは六頭であつたりした。また絵巻式の画面の展開の際には、それまで右から左へと進行していたものが、逆に左から右へと展開していた。

二

この時の敦煌への旅で、思いがけず私は、九月一日の夜、敦煌市内にある敦煌研究院の幹部の李振甫画伯の自宅の夕食に招かれて、御夫妻やお子さんと一緒に食卓を囲み、敦煌名物のラーメンを御馳走になった。湯気の沸き立つ鍋を囲んで戴くラーメンの味もさることながら、家庭に招かれて、家族と一緒に箸をとるその雰囲気が、敦煌の市内のホテルで、朝夕一人で食事をしてきた私にとって、なんと心温まる接待であろうか。帰りに、画伯は御自身の描いた「飛天図」に猷呈の署名をして、今夜の記念にと仰言つて、私に下さった。その「飛天図」は額装して、私の家の座敷の欄間に架けてある。

敦煌から帰ってきた私は、李振甫画伯に倣つて、敦煌か

ら成城大学へ来ている若い人たちを夕食に招いたが、正月には、屠蘇や御節料理おせちが十分にある一月二日の夕方に招いて鏡餅を供えた座敷で妻とともに歓待した。日本での客を迎える作法どおり、松飾のある門から石段を上って玄関まで、そして玄関内も水洗いして清めた。ちなみに、わが家の門には木の円柱は立っているが、成城学園の門と同じように、門を閉ざす扉がない。

敦煌や北京からの留学生や研究員をわが家に招きたいわば第一号は、平成二年（一九九〇）の普段の日に招待した賀小萍さんと、当時東京藝術大学美術学部の研究員であった劉永増君の二人で、当時成城大学の大学院文学研究科に在学中の藤井由紀子さんと一緒に来ている（挿図2）。

また私の手許には、平成三年（一九九一）四月に成城大学院文学研究科に研究員として敦煌研究院から来っていた蔡偉堂氏を、翌年（一九九二）の正月二日に、大学院で一緒だった八木春生君（現在筑波大学教授）と八波浩一君（現在出光美術館学藝員）、そして私たち夫婦とともに撮った写真が残っている（挿図3）。敦煌から来日した諸君を迎える正月二日の祝宴は、私が成城大学を満七〇才で定年退職した平成七年（一九九五）まで続けられた。



挿図3 正月2日の夜、卒業生の案内で来訪した敦煌の皆さんとの祝宴

なお、私が退職した平成七年（一九九五）の八月二日、敦煌研究院創立五〇周年の記念祝賀会に招待され、四日の午前中に段文傑院長と共に院内で講演をした。次の五日に、東北大学教授を停年退職後実践女子大学教授となった上原昭一氏が講演をした。七日に敦煌市内のホテルで催されたパーティの席上で、劉會林副院長に、これまで敦煌研究院から派遣された留学生や研究員を、日本の大学で受け入れてきたので、これからは日本の学生や研究者を敦煌研究院が受け入れて欲しいと、要請した。

その翌年の平成八年（一九九六）の八月二三日の午後、敦煌研究院で朝日新聞社主催のセミナーが行われた際に、同月二六日に、敦煌研究院で段文傑院長を表敬訪問して、朝日新聞社の学芸部次長金成英雄氏、朝日新聞事業株式会社取締役の寺出訓三氏とともに、私は昨年会った劉會林副院長に、ぜひとも日本からの一年間の派遣留学生を受入れて欲しい旨の要望をした。ようやく賛成を得て、契約書に両者の調印がなされた。なお、その際に、蘭州大学で二ヶ月の学習を受けることが義務付けられた。

三

敦煌研究院・蘭州大学・朝日新聞社との共催による『敦煌研究員派遣選考会』が、朝日新聞本社の別館で始つたのは、平成九年（一九九七）四月からであった。選考委員長に成城大学名誉教授の私が任命され、実践女子大学教授の上原昭一氏、創価大学名誉教授の池田温氏、龍谷大学名誉教授の上山大峻氏、東京国立文化財研究所名誉研究員の西川杏太郎、東京芸大名誉教授の水野敬三郎氏が選考委員となり、朝日新聞社の金成秀雄氏が同席した。

平成九年四月の第一次には、いみじくも成城大学大学院文学研究科美学美術史専攻博士課程前期二年の田中知佐さんと、同じく後期一年の山口香代子さんが、東北大学大学院文学研究科博士課程の谷口耕生氏とともに選出され、五月二七日から八月二〇日まで出かけている。なお成城大学の関係者としては、第九次の平成一二年九月一日から一月三〇日まで成城大学文藝学部非常勤講師の北村永さんが派遣されている。

敦煌への派遣は、この第九次が最後であった。派遣され

た研究者は二十二名であるが、成城大学関係者が三名も撰抜されているのは、やはり往年の成城大学と敦煌文化院との交流と無関係ではないように、私には思われる。

なお、敦煌からの帰国後、成城大学出身の田中知佐子さんは、『朝日敦煌研究院派遣制度紀念誌』（二〇〇八年、朝日新聞社刊）に、論文「敦煌莫高窟早期壁画における対の図像の展開——龍車・鳳車図」（維摩・文珠図）（託胎生・出國図）を繋ぐもの——」を、また北村永さんは「敦煌佛爺廟湾西晋画磚墓について」をそれぞれ発表して、敦煌派遣の成果を挙げていることは、大いに注目されてよい。

四

私が、敦煌の莫高窟に関心を抱くようになったのは、昭和三八年（一九六三）に、神田神保町の古書店街の裏通りにある中国書籍専門店で、潘絜茲著『敦煌莫高窟藝術』（一九五七年、上海・新華社書店刊）と、敦煌文物研究所編『敦煌壁画』（一九五九年、北京・新華書店刊）を入手してからである。

『成城文藝』に連載中であった「玉虫厨子制作年代考」

の第九篇に（絵画意匠より見た玉虫厨子の様式年代について）の原稿を書きながら、その玉虫厨子の描かれている絵画の祖形を、雲岡・龍門両石窟の壁画とともに、敦煌壁画の上にも探してみたからである。前出の『敦煌壁画』を購入することが、当初からの目的であったが、偶然に見付けた潘絜茲著『敦煌莫高窟』を、中日辞典を引きながら読んでいくうちに、莫高窟の成立や、ペリオなど西方からの探險隊のことなどにも興味をおぼえ、いつの日か敦煌の莫高窟を訪ねてみたいと思うようになったのである。

はじめて私が、敦煌文物研究所（後の敦煌研究院）を表敬訪問し、四日間わたって莫高窟の諸窟を見学したのは、一一年続いた中國の大文化革命が終結した二年後の、一九七九）の四月のことで、『中国佛教美術研究会友好訪中団』（团长埼玉大学教授山口静一）の一員としてであった。私も副团长を要請されていたので、成城大学の同僚西山松之助教授（日本文化史）と田中日佐夫教授（日本史）の二人を誘った。団員は総員十五名で、大学関係者と佛教関係者によって構成されていた。

莫高窟で最初に案内された北凉の小さな窟内の尊像の前



挿図4 1979年4月、敦煌文物研究所の常書鴻所長夫妻との対談

で合掌して、「般若心経」を誦じた東大寺の平岡定海師の姿が、今もなお忘れられない。

四日間、蔣毅明女史の案内で、北涼から宋に至る諸窟をめぐり歩いたが、私が最も関心を抱いたのは、私の玉虫厨子研究の原点となった「捨身飼虎」図であった。

私が成城大学在職の四〇年間にわたって 法隆寺にある玉虫厨子の研究に没頭したのは、昭和三二年（一九五七）の三月、成城大学の文藝学部第一回生の学生をつれて、もともと美学と西洋美術史が専門であった私は、その年に講義した西洋美術史の実習をするために、岡山県の倉敷にある大原美術館に出かけたが、学生たちの間から、せっかくの長旅なので、奈良へ立寄って、大和路を歩いてみませんかと誘われて、はじめて法隆寺で玉虫厨子の須彌座側面に「捨身飼虎」図の前に立ち、長身の貴人が上衣を木の枝に懸け、崖の上から虚空に身を投げて、わが身を崖下の餓えた母虎と子虎たちに与える、その従容として死に就く姿に、心の震えるばかり感動したからである。

それというのも敗戦の前年、学業半ばで海軍の飛行科予備学生を志願して、土浦の航空隊に入隊して以来、鹿児島県の桜島の水上特攻基地で終戦を迎えて復員してからも、

死への怖れから解放されることはなかったからである。

私たちは、北魏から宋代に至る諸窟を見てまわった後、四日目の午前中、蘭州への出張から戻られた敦煌文物研究所の常書鴻所長を表敬訪問して、御夫妻と歓談した。常所長は私が法隆寺の研究者だと御存知だったのか、解体修理中の法隆寺金堂が、昭和二四年（一九四九）一月二六日の未明に失火し、罹災する前に、抜き取って倉庫に保存してあった金堂内陣小壁の「飛天図」の安否を問われた。戦時中から、須弥壇の本尊が疎開した金堂内では、蛍光灯下で外陣の壁画の模写が行われていたのである。

なお常書鴻所長とは、その年の暮に来日なされたときに再会し、「敦煌の魅力を語る」と題する座談会にお招きし、私は司会者をつとめたが、そのときも敦煌莫高窟の「飛天図」と法隆寺金堂の「飛天図」との比較が話題になった。敦煌を熱愛しておられた井上靖さんも同席して下さった（『世界』一九八〇年一月号所収）。

私は、その時以来、敦煌へは成城大学退職後も含めて十三回訪れている。十三回目の平成一六年（二〇〇四）八月一六日には、樊錦詩院長の主催する、常書鴻先生誕一〇〇周年、並びに敦煌研究院成立六〇周年を記念する国際学会

に招かれて、外國人学者を代表して、「敦煌石窟は人類の宝である―常書鴻先生の忘れえぬ言葉―」と題して講演をしたことも忘れられない。

深い友情に結ばれてきた段文傑院長が退任してからも、私は蘭州の隠居のお宅を二度も訪ねている。また二〇〇七年刊行の『敦煌研究』4号に「尊敬する段文傑先生の九十華誕を祝し、多大の功績を讃え、長年の友誼を謝す」という一文を寄せている（完）。